

Title	守屋さんと私
Sub Title	Mr. Moriya, my great friends
Author	渋井, 清 (Shibui, Kiyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.369- 379
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0375

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

守 屋 さ ん と 私

澁 井 清

守屋さんに初めて会ったのは1920年である。それから今年は68年であるから、48年間、おもえば長い付合である。

23年に慶応を卒業するまでは、同じ文科の学生としての付合であった。その頃から、既に、哲人としての荘重な容姿態度が守屋さんには備わっていたように見受けられた。見るからにパッションेटに見えたであろう私などとは、人柄が、まったく異っていたのである。つまり、彼と私との間には、最初から距離があった。それでも、二人連れ立って、大森辺の樹木の奥^{うか}いところ、赤い社^{もり}のあったほとりを、語り合って散歩した記憶がある。後年、彼の語ったところによると、彼が、向柳原に在った私の旧い屋敷へも訪れて来て、美術について語ったこともあったというのだが、何を言ったのだから私の放言だから、私には余り記憶が無い。そういえば、そうかとうっすらとした、そんなこともあったか、という気もする。

見るからに、秀才とか俊敏、才気煥発といったたちではなく、若いににあわず、いかにも篤実な人柄で、誠実そうな荘重さがあった。ホルバインの肖像画の一人物を見るような風貌のもちぬしであった。

洒脱さとか、江戸風な軽快さといったものは微塵もない。だから、私が、風呂屋の三助になって女体を見たいといったと、驚いてしまって強い印象があると言い張るのだが、私には、そんなことを放言した記憶は、今ではまったくない。彼にそんなに強い印象があるところをみると、或はそうかも知れないが、彼にも亦、そんな下地は在り過ぎる程あって、若者二人だけの語り草とはいいい乍ら、そんな破廉恥な放言を出すか出さぬかが、

私と彼とのピンと張った距離であったろう。私は、学生であったかたわら、春日町にあった川端画学校に、モデルのデッサンの修業にも通った。石膏のデッサン科を卒えて、人体のデッサンになると、なんとなくきびがわるくて、いつとはなく遠のいてしまった。

慶応を卒業して震災にあってからは、籍を置いた大学院も休講同然だったし、一時、再出発を考え、絵筆をとったこともあった。セザンヌ張りの風景画を画いたが、間もなく家督相続という出来事を契機として、休止するに到った。

昭和のはじめは、まだ東京震災の復興やら、家庭的ゴタゴタやらで明け暮れしているうちに、とぎれた美学美術史科再初の卒業生ともいうべき岡、川橋、是則の三君が、駿河台の拙宅へ訪ねて来て、美術史研究会の会合をもちたいという。そこで、曾て、沢木先生の創立された三田芸術学会の再興を告げたところ早速そのはこびとなった。昭和6、7年頃のことであつたらう。

いま、昭和10年度の三田芸術学会第4回報告の印刷物が手元にある。それによると、月次例会も第29回目を迎えているのであるから、昭和7年には始まっていた。沢木先生が亡くなられて後のことであり、この再興三田芸術学会には、唯一人学校に止っておられた関係もあって、当初から守屋さんに会長となってもらっている。

その頃は、古い美術、特に「焼物」に対する鑑賞趣味のおこった時代であつて、私のような若者でない、大人仲間のうちに「彩壺会」といったような会があつて、50名ちかくの会員があり、晦日に、新橋の料亭「山口」に毎月会合し、会員には、池田成彬、畠山一清、原邦造、中条精一郎、大河内正敏、大橋新太郎、大森義雄、横河民輔、山口吉郎兵衛、福井菊三郎、藤田謙一、近藤滋弥、小西新右衛門、朝吹常吉、佐藤功一、清水揚之助、塩原又策、森村市左衛門といった面々がいた。若い乍らも、柏原孫左衛門、西村総左衛門などと共に、私も会員にされていた。この「彩壺会」

の昭和9年度の報告書に倣って、三田芸術学会の第4回報告書も、実は私が発案でつくったものなのである。

この三田芸術学会は、研究の例会報告ばかりでなく、見学をも活発に、しばしば行なった。昭和13年10月23日は、日吉から西の方、たいへん草深い奥まったところにある影向寺に見学に行ったことがある。木造の薬師如来像の安置された祠も非常に古めいていて、大公孫樹の黄葉が、掃きもつきせぬままにうず高く散りしいていた。その帰途、秋のこととて、たわわに黄金色なす栗のゆたかな一穂を、家づとにと、いかにも大事そうに手に持った守屋さんの姿がなぜか、今もって、強く、私の印象にやきついている。

守屋さんの海外留学の送別会は、たしか二度やったように思う。一度は、送別会をやったが何かの都合で延び、いよいよ本決りとなった時の送別会は銀座でやった。その時守屋さんは、猪口一杯の酒でしたたか酔われて横になってしまった。身体の具合であったかもしれないが、まったく酒には弱い。私も酒は、弱いというか量飲は出来ない、鑑賞酒というか、少量は好きなのであるが、遂に、泥酔に及ぶおもむきを解さないつまらない酒である。しかし、守屋さんのように一杯の酒で倒れるようなことはない。

たばこに関しては、終戦直前、帰国された時の守屋さんの喫煙ぶりはスゴイもので、たばこ無くしては一日もすごせないといった風であった、私の知り合の伍長から貰ったたばこを、何がしかお分けしたことがある。しかし、守屋さんは、その後まったく禁煙されるようになったが、返って私の方が、この頃では、身体に悪いと知りつつ、益々大量に煙草はのむようになった。

話は戻って、守屋さんを海外に送り出すに当って、むこうへ行くのでは、ダンスの一つ位おぼえておくのもよからうと思って、送別会の帰途、その頃新橋を渡った右の大通りに面した肉屋太田屋ビルのたしか4階に在った「新橋舞踏場」に連れていった。そこで、守屋さんは偉いと思ったのは、

守屋さんと私

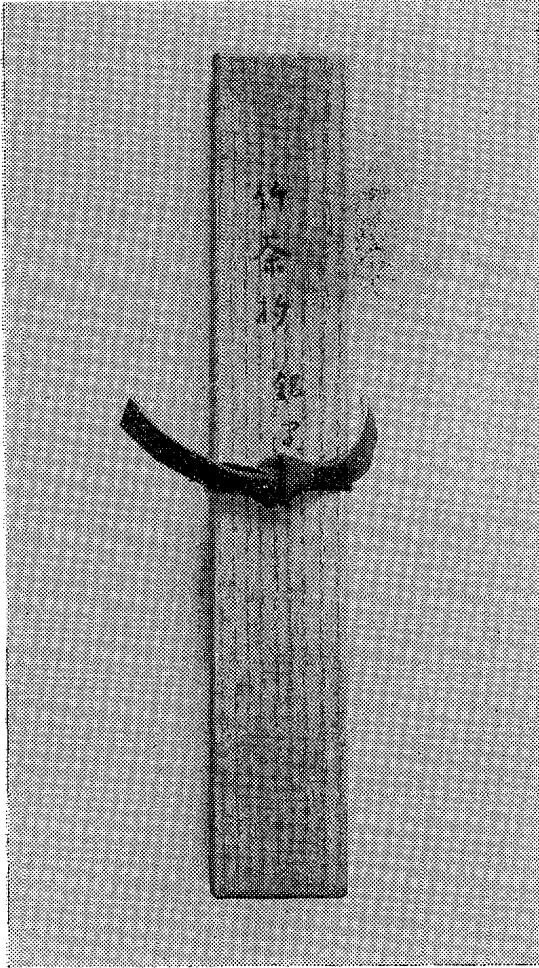
ダンサーの両肩に手をあてて、足の方を見乍ら、体操の前進のように、一っち二、一っち二と足を運ばれた。私などは、そのころは、ダンスを踏めることは出来るようになっていたものの、気があっても、勇気をもって、フロアに出るまでには、半年かかったものである。

守屋さんが日本からいなくなった留守の間に、私は、昭和14年2月号からの三田文学に、美術史学に関する研究を、和木さんのすすめるままに、発表した。14年10月号、15年2、3、4月号、12月号、16年8月号、10月号、17年6月号、11月号、18年11月号と、その中、昭和16年8月号は夏期随筆号というので、「10年雑記」と題して、東京におけるダンス・ホールなるものの発生と発展の歴史と、それが昭和15年8月の警視庁の禁止令によって、3ヶ月後の猶予期間も経過した同年10月1日限り一斉閉鎖となった、東京の亡びゆく享楽面の報告を詳述して置いた。果せる哉、この8月号が出来た数ヶ月後の昭和16年12月8日には遂に、戦争突入となった。私のこの報告は、明らかに、数ヶ月後に来るべきものを暗示していたのである。それから、3ヶ年あまりの戦時は、私どものように本国にとどまっていた者にとっては勿論、守屋さんのように海外に在留していた日本人にとっても、決して豊かな期間ではなかった筈である。そして、守屋さんも、おそらく敗戦の兵の如く日本に戻ってこられたのであろう。

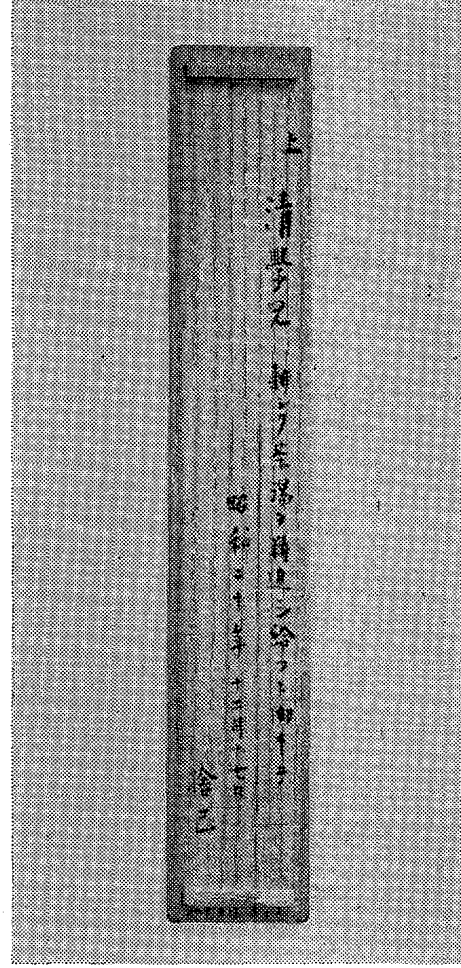
昭和20年8月15日終戦、焼野と化した東京に立ちつくしてみると、飢えた犬が食を求めてさまよう如きありさまであった。それでも、私の家が焼失をまぬがれたのは不幸中の幸であった。

早速、この目黒の家の設計者、堀口捨巳さんの来訪を受けた。そして、彼から、まもなく、贈られた一本の竹茶杓がいまここにある。

函表には



函ウラには



竹茶杓
銘まだき

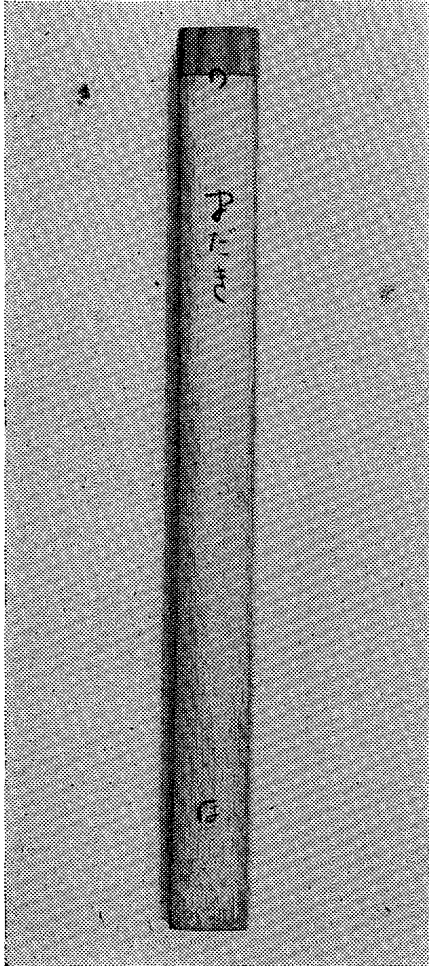
上
清学兄 新シク茶湯ヲ精進シ給フト聞
キテ

昭和二十年十二月十七日

捨己

守屋さんと私

とあり、そして茶筒には



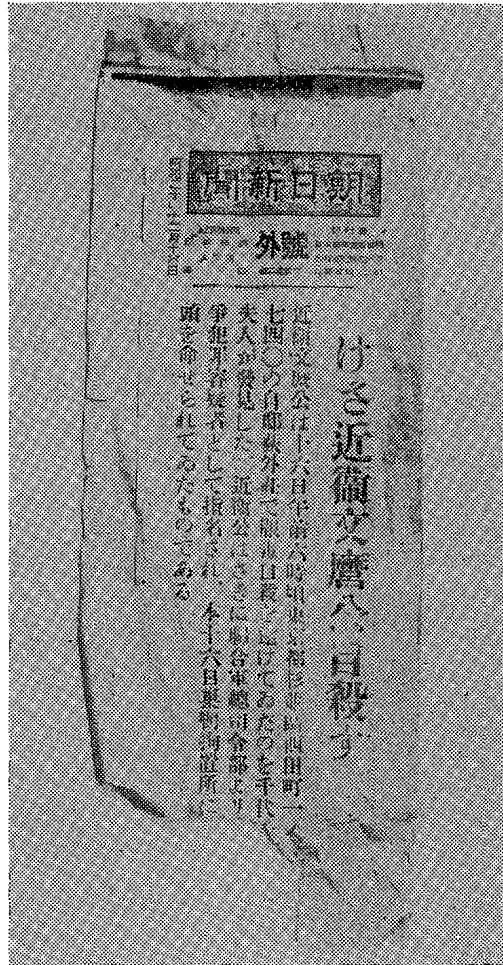
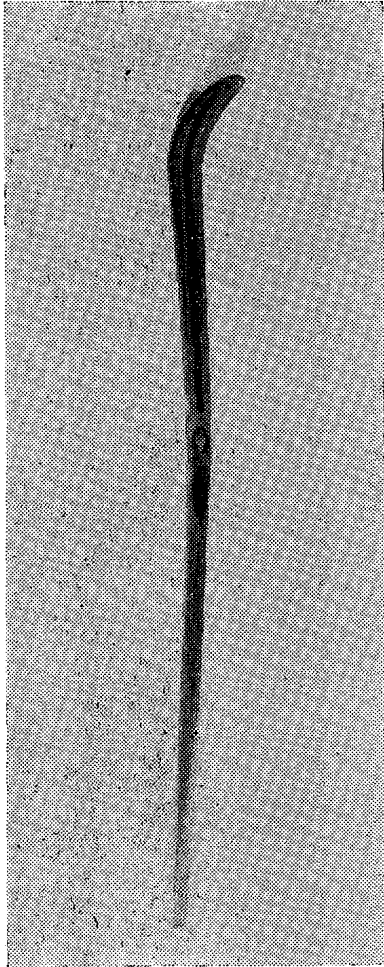
まだき

ほ



しきしまの ひかりにみてる そらなかを
こうこうとして かぜわたるきこゆ 捨

左側面 (昭和二十年)



とある。そして私は、この茶筒を、贈られたその日、そこに在った号外に包んで函に納めた。

けさ近衛文麿公自殺す

近衛文麿公は十六日午前六時頃東京都杉並区西田町一ノ七四〇の自邸荻外荘で服毒自殺を遂げてゐたのを千代□夫人が発見した、近衛公はさきに聯合軍総司令部より□争犯罪容疑者として指名され、本十六日巢鴨拘置所に□頭を命ぜられてゐたものである

(二十年十二月十六日朝日新聞号外)

守屋さんと私

友みなが、一旦はこんな「わび」の心境に在ったであろう、大学が立直り、美術史の如き学問の復活をみるまでには、暫くの歳月が流れた。

この間、いつのことだったか東大の学者連を、きたいというので、守屋さんが案内役に立って私のところへつれて来たことがある。なんでも、その時、落会う筈の中目黒駅で、一番遅れて守屋さんが現われたとかで、途はわからないし、とうとう二時間も駅で待ったそうである。児嶋さんの曰く、僕の人を待たせるのは有名だが、僕をこんなに待たせた人は、守屋君が初めてだ。守屋さんは、ぼくよりうわ手だ、と行って笑った。いま、その時の色紙が遺っているのを見ると「私は東京へ来て嬉しいよヘンな友達が沢山いるよ喜久雄、弘蔵、俊義、美盛、謙二、御主人は清、娘は共子さん、幹柱勇口授、与一代筆」とある。勇とあるのは岩波書店の小林冬青さんのことである。

それから、毎年尽日に、こうした、児嶋喜久雄さんをはじめ、河野与一、宇野哲人、宮沢俊義、矢崎美盛といった東大の学者連中の集いが数年に亘って、つづいた。

児嶋さんは、それから一人でもしばしば来られるようになり、とうとう私も児嶋さんのお宅をお訪ねするようになった。

いつだったか、児嶋さんと、守屋さんと、私と三人で、うちの広間で私が、姫貝を焼き乍ら会談していた時のことである。守屋さんの「書」のことに話が及んだところ、口の悪い児嶋さんのことである「守屋君の字は、なんだってあんなにわかりにくく書くのか、書き方をするのか」と、面当向っている。守屋さんも返答に困ったらしく「えゝ」とばかり、私も聞いている立場を失った。すると今度は、お世辞でもあったろうか「渋谷君、歌麿のことを書き給え、君が歌麿のことを書けば、僕がドイツ語に必ず訳す」とけしかけてきたのである。私も返事に困って、だまっていた。その後、この事を児嶋さんの奥様が知って、「ナンデス、自分の本もろくに書かないくせに、人様のことをそんなことを申しましたか」と、児嶋さんも奥

様にあっては児供のような扱いであった。

児嶋さんと近衛文麿公とは、学習院以来の学友ででもあったろうか、先に掲げた茶杓とそれを包んだ号外とをお目にかけると、なにも近衛は自殺するには及ばなかったのだと、しきりと目頭を赤くしていた。これも友情というものに見られたが、友でもない私には、なぜか「考える輩は、自分が死ぬことを知っている」というパスカルの言葉が思い浮んだ。

それから、児嶋さんは、時に一人で来られ、美術書を借りて行かれたり、著書「填空随筆」や、レンブラントのエッチングを下さったりもした。矢崎さんからも著書「芸術学一様式の美学」を贈られたりしたが、この御両所は、戦後ようやく日本の美術史学がさかんになろうとしてきた昭和25年に児嶋さんが、そして、27年には矢崎さんが、相次いで亡くなられた。実に措しい学者を失ったものである。

その昭和27年の4月から私も、母校の慶応で、日本近世美術史の講座をもつようになり、戦後の美術史学科は、次第に盛んになって来た。私と守屋さんの顔を合せる度合も勢い多くなり、焼け残りの私の家が比較的広かったところから、学生を集めた忘年会を私のところで行うことも屢々あった。守屋さんの御機嫌な謡曲などの聞かれたのも、この頃であった。楽しい関西への美術見学旅行の思い出も数つきないほどある。最初のうちは教師も生徒も、一つ部屋にざこねのこともあり、守屋さんのイビキが意外に大きなことを知ったのもこの時であった。以前は、実に静かで、寂しかった大和巡りの古寺巡礼見学が、日本の美術に対する関心の非常な高まりと
いうか、流行が急激に広まって来たというか、まったく勉強には困るほど、まるで観光団体かなんぞのような殷盛振りを示してきたのも、30年に入ってからのことである。

慶応の美術史科、戦後トップの卒業生はいま助教授をしておられる八代修次君である。見学旅行の学生の世話もよくされてこられたのであるが、学生数がこんなに殖えてこられては、同君の苦勞も大へんだと思われる。

守屋さんと私

丁度、ふえ始めた頃の一夏、守屋さんも、私も、見学に加わった。そして、守屋さんが媒酌をされたばかりとかいう高橋巖夫妻の、その新婚旅行をも兼ねての参加だといって、守屋さんは、この新婚ほやほやの夫妻の宿に招かれて同宿するという。孤独な私は、五条坂の蕪村という宿に、佐藤雅彦君の紹介で一人で宿った。あすは9時、八坂の前で落合う約束であった。翌朝、私が佇んでいると、やがて守屋さんの一行三人がやってきた。みるとはなしに見ると、高橋君の白いワイシャツにべっとりと紅が染まっている。守屋さんは、守屋さんで、今晚は、ぜび君の宿へ私も泊るから連れていってくれと私に曰う。そして、二人して泊った、そんな艶めかしくも楽しい思い出もある。

安部能成、小泉信三という二巨星も地に墜ちたついでその前頃から、守屋さんも、身体を自由を害われるようになった。それでも、守屋さんは、大へん元気で、今もって、授業をつづけておられる。2、3年前の謝恩会の席上で、奥様を伴なわれた守屋さんは、夫婦というものは、長い年月を経て完成するものである。家内なども、昔はそうでもなかったが、今では、全く私と心が同じくなって、私が言葉に云わなくても、なんでも解るようになった。これがほんとうの夫婦の道である。そして、かたわらの私に向って、深い目の底から私を覗き込むようにして、ネ、そうではありませんか、洪井せんせい、という。私は、なにか守屋さんと奥様とは、もう苔むして一躰となったものを見る感じであった。

私は、まだ手足が自由である。手足が動く限り、私の方から守屋さんのところへ、必ず一度は、毎年お訪ねしようとして心にきめている。懐えば、守屋さんと私との付合は、今まででも48年間の永きに亘っている。或は、奥様とのより永い年月であるかもしれない。守屋さんと私との距離は甚だ遠く、私は、今でもすっかり外貌を変えた東京の、コンクリートに築き固められた街路を、雨の降りしきる深夜、一人さまよい歩く。そして、灯火の明るいアン・グラに、若者の群に交って、ゴーゴー ^{リズム・アンド・ブルース} R & B の音楽につ

れて、手足を振って踏み狂うこともある。したが、守屋さんと私とのピンと張った距離の遠さは、いつまでつついても、もう決して、そう遠くはなくなるであろう。(1968, 5, 1)

今にして、日本語を規制しなければならないことは、大問題とは知り乍ら、感謝のおもむくまま、俗語をもって綴る。